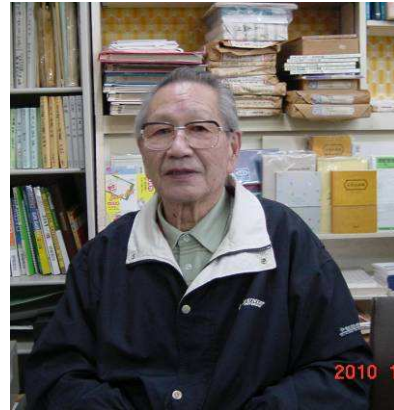


## 昭和の南海地震体験談

氏名: 塩路 武男(しおじ たけお)  
生年月日: 昭和7年1月26日  
地震を体験した場所: 印南町  
当時の家族状況: 父、母、姉二人、妹、弟



### 1) 地震発生時の状況

当時 14 歳、ドーンと、揺れて横揺れして、父が「来るゾッ!」と言って、着替えなどして、すぐに畳を捲って、床板の上に酒の箱(酒屋経営)を置いて、その上に捲った畳を置いて、筆筒の引き出しを抜いて、全部積み上げてから、非常持ち出し袋を持って、近所の寺へ逃げた。その時、前の浜から「津波来る!」と言う叫び声と、まるで豚を絞め殺すようななんともいえない声が聞こえたのを覚えている。その後、お寺では危ないと山に避難した。



### 2) 津波襲来時の状況

地震で津波が来るという事は、印南の人は皆、知っている。  
宝永地震(1707年)の100人を越える被害者の連牌ある。  
避難した山には近隣の人が20~30人登っていた。自分の畑もある開墾した山で、もんがり(豆の添え木)を焚き木にして暖をとった。  
“ザーザー”と田んぼに流れ込む水の音を聞いた。

### 3) 家族の行動・被害

家族全員、一緒に山に避難して無事

### 4) 集落・周囲の被害

周囲では2人死んでいる。集落全体では17人が亡くなった。  
家には夜が明けてから、父に言われて、見に戻った。無事を確認。上がり口まで浸水していたが、畳は濡れていなかった。泥が積み重なっていた。  
その後、印南港を見に行くと、家財道具が浮いて、水面が見えないくらいだった。  
帰帆船が、印南橋の上を越えて、当時あった映画館を倒壊し、かなり上のほうに座礁していた。運搬船も、今の役場位置に座礁した。

5) 地震津波後の生活

自分の家の被害は、皆、それぞれ自分で直した。泥を掻いて出して、洗って生活できるようにした。井戸水は、しばらく塩味がした。

6) 次の災害への備え

一応、保険は入ってはいるが、まずは、自分が逃げること。

昭和の地震津波では、父が「来るぞ」と言ってくれたので、見様見真似でやって、靴を履いて逃げる余裕まであった。

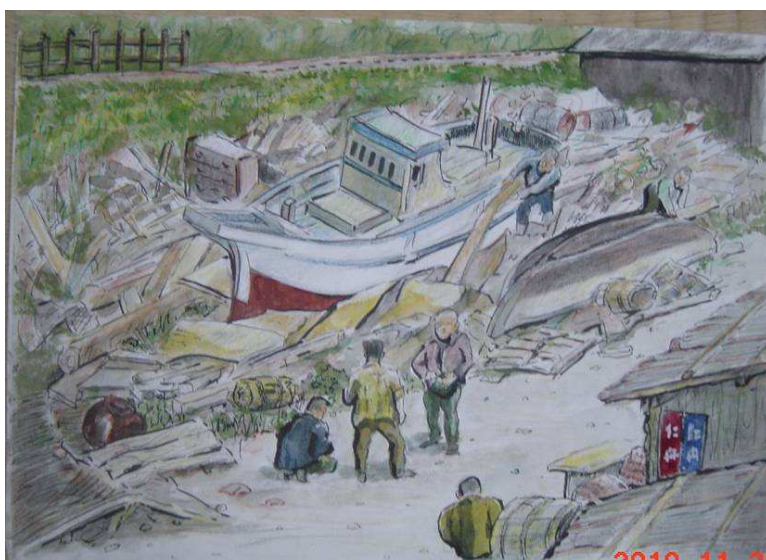
7) その他

以前は、区長もしたが、今は、「ふるさと探訪クラブ」の会長をしている。

皆、地震＝津波を知っていたのだから、何が、生死を分けたかは、いかに落ち着いて行動し、避難したかに拠る。



浜から家に行く道の様子  
作絵:浦森 勉氏



印南川を遡上して田圃に座  
礁した船  
作絵:浦森 勉氏